

※随時更新します。

調査研究による卒業論文作成の注意点 ～問題・方法・結果・考察・引用文献～

<テーマの設定>

*調査研究や実験研究の場合は、研究テーマ、テーマに関連するキーワード、概念を意識するとともに、独立変数、従属変数がどの概念に該当するのか、ということを考えましょう。

*自分がどのようなテーマに関心があるのか、またその領域では、どのような先行研究があるのか、ということをテーマを設定する際に考えてゆきます。自分の関心については、自己の内面的な動機付けを探索すること、先行研究については、当該分野に関する研究の流れを捉えることが必要です。どちらもかなり労力と時間を要する作業になります。

*心理学研究では、仮説検証型の研究が一般的ですが、臨床心理学の領域では、心理療法に関わる事例研究がかなりの割合を占めています。ところが、卒業論文や修士論文では、事例研究を行うことはほとんどありません。そのため、臨床心理学の卒業論文や修士論文で、適切なテーマを設定し、適切な研究方法を考えることは、なかなか難しい課題であると言えます。さらに、臨床心理学研究のテーマは、しばしば、研究者自身の心理発達の課題や、自身のコンプレックスが関わっている場合さえあります。卒業研究や修士論文の研究は、学術的な意味だけでなく、自分自身にとっての意味を考える機会になるかもしれません。

*これまでのゼミでは、探索的研究、インタビュー調査を基にした質的研究、文献的研究などに、取り組んできた先輩が何人かいます。これまでの卒論・修論のテーマのページを参照してください。試行錯誤をしつつ、手探りで進めることも、なかなか大変な作業ですが、挑戦的な試みを歓迎します。

<問題>

*先行研究を調べ、どのような研究が積み重ねられているかを記述する必要がありますが、先行研究を引用する際に気を付けてほしいことがあります。それは、先行研究の問題部分の記述を引用しないようにする、ということです。問題部分を引用すると、孫引き（実際に元の文献を読まないままに引用し、そのまま引用文献リストにも挙げること）になりがちです。ですので、先行研究を引用する際には、結果や考察部分から引用することを心掛

けてください。

また、引用文献を上げずに、無断で文章をコピーする行為は、剽窃（ひょうせつ：文章の無断引用）と言い、重大な研究倫理違反になります。カンニングと同等の行為であり、剽窃が発覚すると、卒業論文は、不合格になりますので、**引用元を示さないでコピー厳禁**を忘れずに。

* 先行研究を引用する際の記述の仕方について、ルールに従うことが大切です。論文を作成するときは、常に、「日本心理学会 執筆・投稿の手引き 第3章 「心理学研究」の投稿原稿の作り方」https://psych.or.jp/manual/manual05#3_6_1、または、「心理臨床学研究 論文執筆ガイド」

https://www.ajcp.info/pdf/rules/Publication_Manual_for_Journal_of_AJCP.pdf#nameddest=writinggist を参照しましょう。

* 卒論の場合、本文を1ページにつき40字×30行で、17ページ以内で作成します。＜問題＞の章は、3ページ程度を目安として記述します。なぜ、その研究テーマに決めたのか、自分なりの動機付けと、テーマに関する先行研究の流れ、先行研究における問題点について批判的に考察したこと、関連する問題などについて、まとめてゆきます。

* 先行研究の文献検索は、卒論の作成前においては、卒論のテーマを考えるために必要ですし、テーマが絞れてくれば、そのテーマに関わる研究としてどのようなものがあり、研究の流れをまとめるために必要です。また、調査を実施し、結果の分析を行っている段階や、考察を記述する段階でも、自分の研究の意味、意義を考えるために先行研究を検索します。

* ＜問題＞の記述では、あらかじめ、研究テーマに関するキーワードをいくつか考えておき、そのキーワードを中心に文章の構成を考えると、＜問題＞を記述する際に、整理しやすくなります。

先行研究において＜問題＞に対してどのようなアプローチが取られてきたか、例えばどんな質問紙尺度を用いたか、どんな手続きが取られた研究であるか、また自分の研究のモデルとなる先行研究があれば、その研究について＜問題＞の章で詳しく記述してください。

＜目的・仮説＞

* 研究の＜目的＞は、論文の中で、中心となる部分です。＜目的＞に従って、研究方法（調査対象者、調査の手続き、調査に用いる質問紙尺度、検査用具など）が決まります。次の＜結果＞の章において、得られたデータの分析の手順も＜目的＞に沿って進めます。研究

の目的は、シンプルに言うと、「自分が決めた研究テーマについて調べること」になります。しかし、論文において、自分の研究テーマに関わるキーワードや、テーマに関連する問題などを考えることで、研究テーマが広がり、いくつかのサブテーマに分けられるようになっているはずです。そこで、＜目的＞では、シンプルに一つの目的を記載するだけではなく、目的をいくつかに区分して記載できるように検討してください。

＊＜目的＞と研究方法（調査対象者、調査の手続き、調査に用いる質問紙尺度、検査用具など）、結果の分析方法は無理なく対応していることが必要です。研究方法や結果の分析方法が目的に沿ったものであるかを確認しながら研究を進めますが、まず研究の目的、仮説を整理してから、研究方法、分析方法を考えるという方向性になります。ただし、調査対象者や質問紙尺度、検査用具などの研究方法をまず先に考えて、その次に目的について整理してゆくという方向性で進めることもしばしばあります。（例えば、「～尺度、～テストを用いた研究をしたい」とまず考えてから、研究の目的について明確化してゆく場合です。）研究の目的と、研究方法や結果の分析方法が、無理なく対応しているというのは、トンネルを逆方向から掘り進めてうまく、トンネルが貫通するようなイメージにもなります。一方向だけで進めてゆくと出口が、思っていたのと違う方向を向いているということにもなりかねませんので、両方向から進めることも大切です。

＊仮説は、データの分析を行った時、どのような結果になるかという予想を記述します。あてずっぽうの予想ではなく、先行研究に基づいて、論理的に導き出されたものが仮説と言えます。分析の結果が、仮説を支持するものか、そうではないか、ということが論文の軸になり、その点を考察することによって、目的から考察まで、筋の通った論文に仕上がります。仮説を考えることは、結果の分析方法を考えることに直接つながっていますので、どのような分析をするかを念頭に置いて、仮説を考えることになります。

＜方法＞

＊方法以降の結果や考察は、過去形で文章を記述する割合が多くなります。逆に、問題や目的の記述では、これから研究を実施する、という未来形で文章を書く形になります。

＊テーマに沿って、調査対象者を決めることが大きな課題になります。これまでの卒業研究ゼミでは、しばしば大学生を対象として、講義の時間を利用して調査を依頼、実施する学生の割合が高かったです。

質問紙調査やインタビュー調査、また質問紙調査でも尺度得点を算出するタイプの質問紙と、自由記述の質問紙の場合では、対象者の人数の目安がどれくらいになるか、どうやって考えたらよいでしょうか。

*卒業研究の調査対象者を考える際に、対象者の人数として何名程度必要かということで困惑する学生の方は多いです。また調査をするために、多数の人に協力を得ることは、卒業研究作成の過程で、気苦労の多い作業になります。

もし、大学外で、調査会社に依頼して卒業研究と同じ調査を実施すると、かなり高額な費用が掛かります。卒業研究であれば、大学内で、無償で調査に協力してもらえる場合が多いですが、実際、それは学生だからできる特別なことであると言えます。

また調査対象者の選定、サンプリングは、多数の調査モニターを有する調査会社であれば適切に行えますが、卒業研究のように個人で実施する調査では、適切にサンプリングを行った上で、調査協力者を得ることがなかなか難しく、個々の学生が調査の協力を得られる範囲で実施することになると思います。

それらの事情も踏まえて、対象者の人数を決めるということになります。これまで荒井ゼミでは、卒業研究で数量的なデータ分析を行う場合、平均値の比較（ t 検定、分散分析など）、ピアソンの相関分析、因子分析、ノンパラメトリック分析（ χ^2 検定など）を用いることが多かったので、それらの分析を行うのに必要なデータ数を得ることを基準に対象者の人数を考えています。

さらには、臨床心理学科では、過去の卒業研究で、どの程度の人数の調査を行ってきたか、ということも目安になります。これらの様々な事情を考慮して、調査対象者の人数を決めてゆきます。

*コロナ禍で、授業中に質問紙を配布するよりも、**GoogleForms** でアンケートを作成して、アンケートのリンクを調査協力者に提示する形の調査が増えています。調査協力者数を確保するためには、**GoogleForms** を使用したとしても、授業中に回答をしてもらう方が回答率が高くなりますので、授業で調査協力を依頼する先生に、受講生の人には授業中での回答して欲しいということを予め説明をしておきましょう。

*調査の手続きについては、質問紙調査の場合は、調査の実施場所や時期、どのように配布、回収したかということを説明します。

調査に用いる質問紙尺度、検査用具など、既存のものをそのまま使用するか、自分で変更を加えたり、教示文や質問項目に関して、自分で作成したか、ということによってかなり異なります。既存のものを変更した場合には、的確に、また丁寧に説明をする必要があります。

心理学研究で、自分で尺度を作成するには、妥当性や信頼性を検証するために必要な作業がかなり増えます。また、「心理学研究法」、「質問紙法実習」の授業の内容の復習が必要です。尺度を作成するのであれば、それだけで、卒業論文を1本書き上げることができます。逆に、卒業研究のテーマが、オリジナルとなる尺度を作成することではない場合は、既存

の質問紙尺度を使用して、研究の目的に沿った調査の計画を立てることが必要です。また、既存尺度をそのまま使用する場合は、自分の研究にオリジナリティをどうやって持たせるかということが課題になります。既存尺度を用いた場合は、膨大な先行研究の中には、自分がやろうとしている研究と、同じものがすでにあると考えてください。

研究において、オリジナリティは非常に重要な点で、先行研究の流れを把握した上で、これまでにはない視点を加えることができたり、これまではカバーできていなかった領域に踏み込むことができたりすることが、研究として価値のあるオリジナリティであると言えます。研究としてのオリジナリティが自分自身の研究への動機付けと一致することができれば、研究テーマの設定がとても成功したことになります。

*既存の質問紙尺度を用いる場合、尺度を使用する目的、測定する概念によって、尺度を選択することになります。どの質問紙尺度を選択するかを検討する際、「心理測定尺度集」、「心理学研究」、「教育心理学研究」、大学の紀要などに掲載されている尺度から、複数の候補から最も適している尺度を選択することになります。選択の基準として、「心理測定尺度集」、「心理学研究」、「教育心理学研究」に掲載されている尺度のように、妥当性、信頼性の検証までしっかりなされている尺度であることがあります。また、尺度に含まれている下位尺度（下位因子）の構成、質問項目の内容が自分の研究の目的や測定しようとする概念に一致していること、質問項目数が適度であることなどがあります。

*使用する質問紙尺度は、多元尺度であるか一元尺度であるかということを確認しましょう。多元尺度とは、測定する概念が下位概念に分かれており、因子分析によっていくつかの下位尺度項目群から構成されている尺度になります。データの分析する際の注意事項は<結果>の欄を参照してください。

*既存の質問紙尺度を用いる場合、教示文、回答欄の選択肢、5件法などで程度を表す形容詞・副詞などは、既存尺度と全く同じにする必要があります。既存尺度が掲載されている引用元の論文に、質問紙の教示内容や、回答欄の選択肢についての記載がない場合は、質問紙調査の手順、計画に関する解説本を参考にして、自分で作成しましょう。

*質問紙調査の場合、質問紙尺度を用いる他に、調査協力者についての基本的な属性を尋ねるフェイス項目や、自由記述の質問項目、独自の選択式の質問項目を設定することがしばしばあります。質問紙尺度以外の質問項目を設定する場合、結果の分析方法のオプションがかなり増えることになります。

自由記述の質問項目を設定すると、自由記述の回答内容の分析方法として、回答のカテゴリ分けをして、カテゴリ毎の回答数を算出することができます。また、カテゴリ間の関連について、KJ法を用いてモデル図を作成することもできます。

独自の選択式の質問項目を設定する場合、単純集計により、回答数や回答の割合を算出できる他、カイ2乗検定などノンパラメトリック検定を用いた分析が可能です。

また、調査協力者をグループ分けして、質問紙尺度得点に関するグループ間の比較（ t 検定や分散分析、グループごとの相関分析など）ができます。（自由記述の質問項目をカテゴリー化した場合でもグループ分けが可能です。）

グループ分けの方法として、2次元の質問紙尺度を使用する場合は、2つの下位尺度得点のそれぞれの中央値を算出後、それぞれの中央値よりも高い得点の対象者（H群）、低い得点の対象者（L群）として、両方とも高い群（HH群）、片方が高く、片方が低い群（HL群、LH群）、両方とも低い群（LL群）の4群に分ける方法があります。

また、多元的な質問紙尺度を用いる場合は、クラスター分析によって、対象者をグループ化する方法もあります。

*質問紙尺度以外の質問項目を設定する場合、結果の分析方法のオプションが増えますが、前述したとおり、結果の分析方法は、研究の目的や仮説と対応している必要があります。どのような質問項目を設定するか、ということについて考える際、研究の目的や仮説を考える段階にまで戻って、改めて考え直すようにしましょう。

<結果>

*質問紙調査や実験など、データの収集にはかなりの日数を要します。予定していた人数に調査が完了するまでの時期には、エクセルにデータを入力し、エクセルのデータをSPSSで読み込み、統計分析をどのように行うか、試してみてください。どのように分析するか、手順がわかっているれば、調査が完了し、データがそろった時に、分析がスムーズに進められます。

*<結果>の分析には、おおよそ決まった順序があります。一般的には、質問紙尺度の項目分析、因子分析、信頼性分析の記述があり、その後に、平均値の比較（ t 検定、分散分析）、尺度得点間の関連を検討（相関分析、様々な多変量解析など）の記述となります。尺度得点以外のデータで、順序尺度のデータの分析や度数の検定（ χ^2 乗検定、ノンパラメトリック検定）を行う場合もあります。

質問紙尺度を用いた調査では、尺度得点、あるいは下位尺度得点を算出することが第一の目標となります。

*質問紙尺度には、一元尺度と多（次）元尺度があります。一元尺度は、例えば、ローゼンバーグの自尊感情尺度などがあります。その自尊感情尺度は10項目から構成されますが、逆転項目の処理をした上で、項目得点の合計得点を算出します。それが尺度得点とな

ります。

逆転項目の処理の仕方逆転項目の算出を忘れると、分析結果が大きく異なってしまいます。細かい作業ですが、よく注意してください。

＊多（次）元尺度の場合は、質問項目が、いくつかの下位グループに分かれています。例えば、友人関係尺度（岡田，1995）は 22 項目から構成され、因子分析の結果、「気遣い」因子、「ふれあい回避」因子、「群れ」因子という 3 因子が抽出されました。岡田（1995）因子分析結果の表を見ると、3 因子のそれぞれに高い因子負荷量（0.45 以上）を示している項目によって、3 つの質問項目群に分かれ、それぞれの項目得点の合計が、下位尺度得点となります。つまり、友人関係尺度は、3 つの下位尺度から構成されています。

＊例えば、自尊感情尺度のように一元尺度を用いた場合は、自尊感情得点という一つの尺度得点が算出されます。自尊感情尺度は、すでに多くの研究者によって使用されてきたもので、改めて項目分析を行う必要はありませんが、様々な尺度の中には、項目分析によって、得点の偏りがないか確かめる必要がある尺度もあります。項目分析とは、個々の項目得点の平均値、標準偏差を算出して、天井効果、床効果を確かめます。平均値 + 1 SD が項目得点の最大値を超える場合は天井効果があり、平均値 - 1 SD が項目得点の最小値よりも小さい場合は床効果があることになります。天井効果、床効果が生じている項目は、偏りがあると判断されます。

＊多元尺度を用いた場合は、因子分析を行うか、因子分析をせずに、下位尺度項目の信頼性分析を行うことになります。因子分析を行った場合も、下位尺度項目の信頼性分析は必要です。信頼性分析は、I-T 相関分析、G-P 分析、 α 係数の算出などの方法があります。因子分析を用いた研究では、 α 係数を算出する場合はほとんどです。

α 係数は、SPSS を使用すれば、尺度項目を指定するだけですぐに算出されます。I-T 相関分析や、G-P 分析の場合は、決まった手順があります。

＊信頼性分析の例として、SPSS を用いての I-T 相関分析、 α 係数算出の手順は次のようになります。

I-T 相関分析による項目の選定：I-T とは項目（item）得点と合計（total）得点の相関を表します。合計得点との相関が低い項目は、他の項目と一貫していない項目と見なされます。

i) 自作尺度の合計点を算出する。

データ入力後のシートで、Q**（自作尺度の最後の項目）の右列に一行挿入する（変数名のセル上で右クリックして「変数の挿入」）。変数名は、「〇〇（尺度名）合計」とする。

「変換」→「変数の計算」とし、目標変数に「〇〇合計」と入力し、数式に「Q**（項目番号）+Q**+…+Q**」と入力する。「OK」を押す。

ii) I-T 相関分析の実行

「分析」→「相関」→「2 変量」とし、変数として、Q**～Q**、 「〇〇合計」を選択し「OK」とする。相関係数が、低い（例えば 0.3 未満）項目は削除項目とする。

※図 1 丸印の部分が、自作合計と各項目得点の相関係数を表す。

	有意確率 (両側)	.134	.031	.180	.551	
	N	67	67	67	67	
Q09R	Pearson の相関係数	-.227	-.369**	.262*	-.056	
	有意確率 (両側)	.065	.002	.032	.653	
	N	67	67	67	67	
Q10R	Pearson の相関係数	-.309*	-.549**	.358**	-.196	
	有意確率 (両側)	.011	.000	.003	.113	
	N	67	67	67	67	
自作合計	Pearson の相関係数	.737**	.733**	-.057	.435**	-
	有意確率 (両側)	.000	.000	.649	.000	
	N	67	67	67	67	

** 相関係数は 1% 水準で有意 (両側) です。

* 相関係数は 5% 水準で有意 (両側) です。

図 1 SPSS の相関分析の出力

iii) 尺度項目から、I-T 相関分析で相関係数の低かった項目を削除する。

「変換」→「変数の計算」とし、目標変数を変えずに、数式「Q**+Q**+…+Q**」から、削除された項目を除き、「OK」を押す。

α 係数により信頼性を検討する：尺度を構成している項目同士が互いに相関が高ければ、この α 係数も高くなる。尺度を構成する項目同士の相関が高い時、つまり各項目が共通の事柄を測定するものである時、内的整合性（内的一貫性）があるといえる。

※I-T 相関分析で残った項目のみで分析すること

- i) データビューの「分析」タブをクリックし、「尺度」→「信頼性分析 (R)」をクリック。全ての質問項目を指定し（〈自作合計〉は含めない）、 「→」を押す、右のボックスに移す。次に「統計量」をクリックし、出力されたダイアログボックスの「統計量」のうち、「項目を削除したときの尺度 (A)」にチェックをいれる。「続行」→「OK」で、α 係数が算出される。ここで、分析のために出力されているファイルを印刷する。

出力されたシートの「alpha (アルファ)」の数値が、α 係数を表す。おおよそ、0.7 以上だと概ね内的整合性があるとされる。0.7 未満だと、内的整合性が保証されないなので、項目を削除する必要がある。

- ii) もし 0.7 未満であるならば、出力されたシートの「項目合計統計量」の表の「項目が削除された場合の Cronbach のアルファ」の欄を見て、削除したときに α 係数が一番上がる項目を削除し、再び α 係数を確認し、0.7 以上になるまで繰り返す。
- iii) 合計点から削除された項目を除く。「変換」→「変数の計算」とし、目標変数を変えずに、数式「 $Q101+Q102+\cdots+Q100$ 」から削除された項目を除き「OK」を押す。データファイルに任意の名前を付けて「名前を付けて保存」する。※メンバーにメールに添付してデータを送信する。このファイルは宿題の作業をするのに必要。

⇒削除後の項目得点の合計が、尺度得点を表します。

*既存の質問紙で、多元尺度を使用する場合は、因子分析を行うことを検討します。因子分析を行わない場合として、その質問紙尺度が、標準化の手続きがすでに十分になされており、先行研究において、すでによく使用されてきたものである場合があります。例えば、YG 性格検査や、TEG、Big Five 尺度などは、改めて因子分析を行う必要はないと考えられます。逆に、従来、使用されることが少なく、十分に標準化されていない尺度については、卒業研究における調査協力者数にもよりますが、因子分析を行った方がよいと考えられます。

*因子分析は、SPSS のマニュアル等を参照しながら進めましょう。多元的な質問紙尺度の因子分析は、簡単に言うと、類似した項目同士をいくつかのグループ（各因子に関わる下位尺度項目群）にまとめるために行います。因子分析によって、多元尺度は、いくつかの下位尺度に分けられ、＜結果＞の最初に記載した、下位尺度得点を算出することができます。

多元尺度の項目群からいくつかの共通因子の抽出する作業があります。因子の抽出方法としては、卒業論文作成においては最尤法を用いるのがよいと思います（参照 HP：<https://norimune.net/705>）。

抽出する因子数の決定については、初期の固有値が 1 以上（カイザー基準）、初期の固有値の変化を示すスクリープロットの左側の急な傾きが緩やかな傾きに変化する因子の番号（スクリー基準）、さらに、累積寄与率（累積%）が 30～50%を越える因子の番号が、統計上の基準となります。また、先行研究において、質問紙尺度の因子分析結果が示されている場合、何因子から構成されている尺度であるかということを参考にします。上記の基準などから、因子数を決定し、さらに、実際に因子数の設定を変えて、何度か因子分析を繰り返して、適切な因子数を決定するのが実際的な手順となります。

*SPSS での因子分析の手順を簡略化して示すと次のようになります。（参考：「超初心者向け SPSS 統計解析マニュアル」）

「分析」→「次元分解」→「因子分析」を選択→**因子分析の画面**が現れる。

因子分析の対象となる質問紙尺度の項目を「変数」として選択

因子分析の画面から

「因子の抽出」→「方法」→「最尤法」を選択。「表示」の「スクリープロット」にチェック→「続行」をクリック。（※因子数の設定後）「因子の固定数」にチェック→「抽出する因子」に設定した因子数を入力

「回転」→「なし」（※因子数の設定前） or 「プロマックス」（※因子数の設定後）にチェック→「因子の「続行」

「オプション」→「サイズによる並び替え」にチェック→「続行」

上記の設定をしてから、因子分析の実行「OK」

*分析結果では、「共通性」の数値、「説明された分散の合計」の表、「因子のスクリープロット」の図、「パターン行列」の表などが表示されます。因子分析の結果の表を論文に掲載する際に、「共通性」の数値を記載する場合は、「共通性」の表中の「因子抽出後」の数値を記載します。また、固有値、寄与率を記載する場合は、「説明された分散の合計」の表の「回転後の負荷量平方和」の「合計」の数値（固有値）、「分散の%」の数値（寄与率）を記載します。

因子分析の結果の表においては、各因子の列に対して、各質問項目の数値が示されていますが、それらは「パターン行列」の表中の因子負荷量の数値となります。

因子負荷量の基準としては、概ね0.3～0.4以上とすることが一般的です。各因子ごとの質問項目の因子負荷量が基準以上であれば、それらの項目は、それぞれの因子に負荷しているおり、その因子に大きく関わっている質問項目と見なされます。そして、その因子に大きく関わっている質問項目のグループを、下位尺度項目として採用します。

実際の因子分析結果の表は、先行研究などを参照してください。

*因子分析、項目分析、信頼性分析を経て、個々の質問項目得点を合計して尺度得点を算出します。SPSSを使用した場合には、尺度得点を算出するために、足し算の式を入力する作業も必要になります。基本的な作業ですが、尺度得点の算出までできれば、この後の分析作業の次のステップに進むことができます。

また、尺度得点の平均値、標準偏差（SD）など、基本統計量のデータは、エクセルで、表にまとめ、論文中に記載します。平均値については、例えば性差を検討したり、予め設定された各群の差を検討するための指標となります。性差の場合、男女の2群であるため t 検定、3群以上の比較の場合は、分散分析を用います。

*下位尺度得点の算出ができれば、研究の目的や仮説に沿って、上記の t 検定、分散分析、相関分析、ノンパラメトリック検定、さらに様々な多変量解析などを行います。様々な分

析を試してみて、SPSS などの統計ソフトの使い方にも慣れるようにしましょう。

*分析結果は、SPSS で出力されますが、SPSS で出力された結果をそのまま論文に掲載することはできません。SPSS の出力内容には、論文に掲載するには不必要なデータや内容が多く含まれているためです。論文には、必要な情報のみを記載することが原則です。研究論文は、最初から最後まで、論理的に筋が通る形で記載することが必要です。不必要な情報がランダムに記載してあると、読み手にとって、意味がわからず、困惑させてしまいます。この点で、小説やエッセイと論文は、大きく異なります。

*＜方法＞、＜結果＞の記述は、様々な細かいルールが決められています。再び、日本心理学会編「執筆・投稿の手引き」第4章 “Japanese Psychological Research” の投稿原稿の作り方 <https://psych.or.jp/manual06> または、「心理臨床学研究 論文執筆ガイド」https://www.ajcp.info/pdf/rules/Publication_Manual_for_Journal_of_AJCP.pdf#nameddest=writinggist を参照しましょう。

また、過去の卒論や、自分の研究のモデルとなった雑誌論文の結果の記述方法を細かい点まで確認しながら、論文を書き進めましょう。

*分析結果を論文の本文で記述する際の注意点

＜考察＞

*＜考察＞は、研究の目的、仮説に沿って、どのような結果が明らかになったのか、ということを軸に記述します。目的や仮説をいくつか設定している場合は、それぞれを整理しながら考察してゆきます。

*研究の目的、仮説を検証するためにどのような方法を用いたのか、先行研究を参考にしながらも、調査の方法に自分なりに工夫を加えたなら、その結果はどう評価できるのかということを考察しましょう。既存尺度をそのまま用いた場合は、因子分析の結果や、下位尺度得点の平均値、標準偏差から、先行研究における結果と比較が出来ます。先行研究との違いは、調査対象者の特性が反映している可能性がありますので、卒論での調査対象者にはどのような特徴があるか、ということを考えてみましょう。

*結果が予想通りであったのか、予想と異なる結果が見られたかということを明確にしましょう。結果が予想通りであった場合は、先行研究の結果と整合性について考えてみましょう。つまり、先行研究を再び検索して、類似の結果が示されている研究、異なる結果が示されている研究などを取り上げるとよいでしょう。

*一方、予想と異なる結果が見られた場合には、二つの点について考察が必要です。つまり、仮説の設定に問題があったのかという点と、仮説は問題ないけれども、方法上の問題があったのか、という点です。後者の方法上の問題については、使用した質問紙尺度自体に問題があったのか、あるいは、そもそも研究の目的からすると、質問紙調査ではなく、他のアプローチを用いるべきであったか、という可能性もあります。また、仮説の設定や、方法上の問題もなかったけれども、結果の分析方法に問題があったか、という点も考察する必要がありますかもしれません。予想通りの結果が出なかったことを単に失敗と見なすのではなく、様々な問題点について検討することに研究の意義があります。

*考察の終わりには、まとめと今後の課題を記述します。全体を通して、研究に対する自己評価をしてみましょう。研究の意義には、自分が選んだ研究テーマ・領域における研究の発展から見た意義と、自己の内面的な動機づけの点から見た意義があります。再度、ここに自分の関心があったか、ということを振り返ってみましょう。

<引用文献>

*引用文献は、再び、日本心理学会編「執筆・投稿の手引き」第4章“Japanese Psychological Research”の投稿原稿の作り方 <https://psych.or.jp/manual06> または、「心理臨床学研究 論文執筆ガイド」
https://www.ajcp.info/pdf/rules/Publication_Manual_for_Journal_of_AJCP.pdf#nameddest=writinggist を参照しましょう。

*英語文献、日本語文献のそれぞれで、記載方法が異なります。漢字であれ、アルファベットであれ、論文著者の姓のアルファベット順に記載してください。（心理学系以外の論文では、引用文献を本文中での引用箇所順で記載するものもありますが、心理学系の論文は、著者の姓のアルファベット順です。）

*心理学系の論文では、引用文献のみを記載します。参考文献の記載は不要です。

*引用文献の数や、引用文献がどの学術雑誌の論文を引用しているか、研究テーマにおいては、必読の論文を引用されているか、などは、論文の評価に大きく関わります。論文を読む際に、要旨・summary、その次に引用文献のページに目を通してから、本文を読むことがよくあります。つまり、要旨と引用文献は、書物の表紙と裏表紙のように、論文全体の内容を示すとともに、論文の外見を示すページです。十分に時間を取って作成しましょう。

＜要旨＞

＊論文を一通り書き終わった段階で、要旨をまとめます。要旨は1 ページに収めますが、論文全体をバランスよく圧縮することが重要です。目安として、問題と目的、方法、結果と考察の部分を、それぞれ1／3～1／4の割合で記載することをイメージしてください。本文の中では、方法のページの分量の割合は小さくなりがちですが、要旨においては、調査対象者の属性、人数、調査で使用了尺度等を明記することが重要です。

＊要旨においては、本文の結果のページの中から、どこが最も重要な結果であるのかを考えて、要旨に記載する内容を決定します。特に仮説に直接関わっている結果が重要になります。

＊最後に、卒論をファイルに綴じて提出しますが、ファイルの背表紙にも、学籍番号と氏名を記載するようにしてください。研究室に保存する場合、背表紙に学籍番号と名前がないと、どこに論文があるのか探すのにとても苦労することになってしまいます。

＊以上の内容は、これまでの質問紙調査による卒論の作成を指導する中で、大体共通してお伝えしていることをまとめてみました。また、これからも、気が付いた点などを追記してゆければと考えています。